

博士論文（要約）

論文題目： 目取真俊の^{オキナワ}世界一歴史・記憶・物語

氏名： ブーテレイ スーザン

本論文は目取真俊に関する従来の研究を踏まえ、歴史的資料、記憶とトラウマをめぐる研究や理論、文化人類学、民俗学、心理学的思想、文芸理論等を参照し、あらたにジェンダーの視点等を取り入れ、目取真俊の作品世界を考察したものである。

本論は以下の4つの章から構成されている。

第一章ではまず作家目取真俊およびその作品を紹介し、通底するテーマとしての沖縄戦が、従来どのように語られ、記録されてきたかを踏まえつつ、それらとは対症的な目取真俊の作品における作家独特の戦争の捉え方と語り方の特徴を概説する。そこで特に、従来の「鉄血勤皇隊」「ひめゆり部隊」および「特攻隊」をめぐる戦記に語られた語り、いわば「神話」化された一般に流布されたイメージを目取真俊がいかに突き崩し問い直そうとしているのか、その叙述に注目する。そしてさらに、戦争に巻き込まれ、大きな被害を受けたにもかかわらず集合的な記憶から忘却されている民間人—特に老幼婦女子といわれる人々の戦争体験を焦点化するとともにその力点が置かれていることを作品の全貌として明らかにする。

後半は目取真俊の作品の芸術的側面に焦点を当てつつ、語り得ない、表象不可能と言われるような、被植民者や他者の世界、想像を絶する暴力的なく出来事>等がいかにして表象され、あるいは分有されようとしているのかを考察する。主に、「平和通りと名付けられた街を歩いて」という目取真の初期作品から具体的な場面を引用し、とりわけ三つの特徴を指摘する。それは、非現実的・幻想的要素の取り込み、擬似的体験手法および断片的なイメージや言葉の連鎖による表象といったものである。

第二章においては1997年に発表され、九州芸術祭文学賞、芥川賞を受賞した目取真俊の代表作の一つである「水滴」を取り上げ、テーマ、表現方法、ストーリーの紡ぎ方、登場人物の役割など、多角的な分析を試みる。その分析によりこの作品がある種の変身譚という形を取りながらも、徳正という主人公の個人的な体験を通し、現在に至ってもなお消えない沖縄戦をめぐる諸問題を描いていることを明らかにする。そして「水滴」という作品の意義は、戦争体験を語る当事者たちが、自らの体験として語りのなかに掬い上げられなかった側面を変身譚に架構し焦点化する手法をとることにより、戦争を美化する殉国美談に潜む「国家」や「靖国思想」を暴露し、俗耳に入りやすい「戦争神話」を解体することに成功している点にあると論ずる。

また、そうした戦争神話の解体によりさらに浮かび上がらせられているのは沖縄で実践された皇民化教育や同化の問題、つまり植民地／被植民地という日本と沖縄との関係性であり、そして、それは過去の問題として片付けられることではなく、敗戦後の六十数年間今もなお続いている問題であるということが、徳正／石嶺の関係性によって暗示されていることを、分析を通して明らかにする。

同時に本土＝支配／差別、沖縄＝被支配／被差別という単純なステレオタイプも突き崩し、相互補完的な関係にある戦後の沖縄側の姿勢をも問う作品になっていることを、清裕という登場人物の造型の分析を通して示す。さらに、ウタという登場人物にかせられた役割などを、ジェンダー的視点から読み解くことで従来の読みに見られなかった新しい視点を提示する。

第二章の作品分析の作業に引き続き、第三章では『風音 The Crying Wind』という映画

(2003年)の原作ともなっている中編小説、「風音」(1997年)を分析する。テキストは作品集『水滴』(文藝春秋、1997年発行)による。

「風音」は戦争が神話化される過程とその解体が三人の視点人物を通して描かれている作品であることをまず提示する。

風葬という沖縄固有の宗教的な儀式及びその儀式が行われる場所(風葬場)や沖縄人の死生観等の紹介を踏まえた上で、特攻隊員の遺骨が風葬場で偶像として祭られるといった設定、特攻隊員の象徴性、特攻隊員の遺体を軸にした清吉親子との関係におけるオイディプス的なドラマ等を分析し、それらを通し、沖縄人の精神文化とそのアイデンティティの破壊と喪失がいかに表象されているかを考察する。また、元特攻隊員であり、現在はジャーナリストである藤井という登場人物に焦点を当て、戦後日本のジャーナリズムとの関わりを考察する。その作業により、いかに戦後日本のジャーナリズムが藤井という登場人物を通し問われているかを明らかにする。

一方、芸術的な側面に焦点を当てつつ、「風音」は新たな戦争の記憶の語り方と分有の仕方を模索している作品であり、その意味で重要な意義を持つことを指摘する。それは例えば「風の音」といったロゴス的世界を拒絶するものを通し、言葉に置き換えられないような戦争の計り知れない暴力や恐怖、死者の<声なき声>などを読者に届けようとする試みや、読者の知覚感覚に直接に訴えかけるような表現を多く取り入れることにより、読者に疑似体験をさせ、過去の記憶を分有させようとするところに見て取れると述べる。そして、芸術的な面でこの作品のもう一つ大きな特徴として、読者に与えられる極めて能動的な役割があることを論述する。登場人物の行為や出来事をめぐる詳細は一切語られていないが故にその空白を埋め合わせ、作品中に散らばっている断片的なイメージを紡ぎながら自らストーリーを編み出していくというような役割が読者に託されていることを示す。

なお、この作品の結末には作者、目取真俊自身が小説家としての戦争の記憶を扱う(継承する)上での姿勢の宣言が見て取れることを指摘する。

第四章では1998年に「小説トリッパー」に発表され、川端康成文学賞、木山捷平文学賞を受賞した目取真のもう一つの代表作である「魂込め」^{まぶいぐみ}を論じる。この作品は戦争神話の解体および記憶の掘り起こしを行いながら、戦争をめぐる諸問題、沖縄と本土との関係性を現在に及ぶ視座から捉えるという点において、「風音」、「水滴」などの目取真の他の作品と大きく共通したテーマを内在しており、表現方法の上でも類似点がうかがえることをまず指摘する。その一方で、女性、とりわけ<神女>という、沖縄の土着の文化・信仰の担い手ともいべき存在が視点人物となっている点でそれ以前の作品とは異相を呈していることを述べる。

男性主人公が魂を落とし、その口中に大きなアーマン(オカヤドカリ)が這い込み、巢食うという奇想天外な設定にまず着目し、このアーマンを沖縄本島に君臨する「米軍基地」のイメージとして捉える解釈に疑問を呈する。そして、幸太郎の<魂落とし>^{まぶい}という現象およびアーマンの意味性を考察し、テキストの綿密な分析を通し幸太郎の<魂落とし>^{まぶい}は戦争をめぐるトラウマ的記憶と密接な関わりがあり、口中に巢食うアーマンもまた戦争と深い関わりがあるということを明らかにする。

次に、幸太郎の<魂落とし>^{まぶい}やアーマンの出現には戦争という枠組みでは捉えきれないものがあり、戦争をめぐる話にテーマが矮小化されてしまうと、アーマン、幸太郎と共に主役ともいべき役割を担っているウタが単なる視点人物といった役にとどめられ、ウタと村

人との関係の力学や、「魂込め」という題名に託されていると思われる意味等が不透明のままとなってしまうことを述べる。

その主張を裏付けるべく、ウタ、フミ、新里といった登場人物の力関係に焦点を当てながら「琉球処分」といった歴史上の出来事に触れ、その関係性が紛れもなく「琉球処分」当時の士族の中央政権への抵抗と妥協を喚起させ、ひいてはそれ以来の沖縄内の力関係における大きな揺らぎと変容を物語るものであることを示す。

また、沖縄社会における王朝時代から現代に至る<神女>の役割という歴史的な背景に触れ、かつウタと他の村人との関係性等を分析しつつ、ウタおよび<魂込め>の儀式をめぐる話を通し、沖縄文化の重要な担い手である女性たちが抑圧されてきた歴史（経緯）とその弾圧により引き起こされた沖縄土着の文化の破壊が浮き彫りにされていることを論じる。そして、幸太郎の口に突然現れるアーマンはこのように踏みにじられた沖縄の女性たちの思い、いわば沖縄の女性の抑圧された身体が具現化されたものでもあるということを示し、この作品に『魂込め』をめぐる従来の解釈に見られなかったジェンダーの視点による新しい読みを提出する。

さらに、ラジオ体操たるものが「大日本帝国」の下で行われ、沖縄戦の敗北で幕を閉じた侵略戦争のみならず、日本による沖縄の植民地化とそれにより引き起こされ今もなお続いている沖縄固有の文化や宗教、沖縄人のアイデンティティの破壊を焦点化する重要なモチーフとして、すなわち文化破壊という問題の最も包括的な象徴として、作品の冒頭に布置されていることを論じる。

最後に、アーマンは複数の意味作用をもっており、それゆえアーマンは何か、そしてどうして殺さなければならなかったのか、その謎に向かっていつまでも問い続けなければならない課題が読者に与えられていることを明らかにする。つまり『風音』の読者にも要求されているような役割が読者に与えられていることを指摘する。

このようにして読者に常に考えさせることにより<正史>から欠落し、忘却されている出来事および歴史を掘り起こさせ、ひいては沖縄の現状も探らせるという作業をさせるという仕組みとなっており、それはまた過去の記憶および現在に至る沖縄人の個別な体験を分有し、歴史認識並びに現在の沖縄に対する人々の意識の大きな変容を可能にする極めて有効な方法であることを見出している。そこに『魂込め』という題名に託されているもう一つの意味が見てとれることを述べる。